

## 【第3部】 分科会スピーカー プロフィール

### ○ヒトとテクノロジーがつくる災害に強いまち

モデレーター：中澤 仁（なかざわ じん）

酒井 太郎（さかい たろう）さかい内科・胃腸科クリニック 院長 / 鎌倉市防災・災害医療アドバイザー

獨協医科大学大学院卒業。2001年からアメリカテキサス州のベイラー医科大学、MD アンダーソン 癌センター勤務を経て2007年地元鎌倉でさかい内科・胃腸科クリニックを開院。鎌倉市出身。東日本大災害では宮城県南三陸町。熊本地震でも熊本県益城町で災害医療現場を経験。現在も年数回、東北訪問を継続。昨年台風19号では鎌倉市内避難所での巡回を実施。



中村 彰二郎（なかむら しょうじろう）アクセンチュア株式会社福島イノベーションセンター（CIF）センター長



IT業界、経営コンサル業界を経て、2011年にアクセンチュア株式会社に入社。福島県及び東北復興を目的に設立した、アクセンチュア福島イノベーションセンターのセンター長に就任し、復興支援に従事する。

現在は、震災復興および地方創生を実現するため、首都圏一極集中から機能分散配置を提唱し、会津若松市をデジタルトランスフォーメーション実証の場と位置づけ先端企業集積を実現。そして会津で実証したモデルを地域主導型スマートシティプラットフォーム（都市OS）として他地域へ展開、各地の地方創生プロジェクトに取り組んでいる。

### ○まちづくりとヒトの幸福度

モデレーター：加治 慶光（かじ よしみつ）

安藤 健（あんどう たけし）パナソニック株式会社ロボティクス推進室 総括

早稲田大学理工学術院にて医療福祉ロボットの研究をした後、大阪大学医学系研究科保健学科にて看護分野への先端テクノロジー導入に取り組む。

その後、パナソニック株式会社へ入社し、一貫してロボットの研究開発・事業化に取り組んでいる。現在は、ロボット技術を活用したサービス領域の自動化による生産性の向上や、人の能力を拡張することで生活の質（QoL）の改善を目指した研究開発、事業化を推進している。



小林 正忠（こばやし せいちゆう）楽天株式会社 常務執行役員 Co-Founder and Chief Well-being Officer



1997年 楽天の創業から参画。営業本部、マーケティング本部、国際事業等の立ち上げを行い、EC事業責任者を長年務めた後、米州社長、アジア社長を歴任。

2017年秋より楽天の企業文化強化および社内外のステイクホルダーを笑顔にすることをミッションとする Chief People Officer となり、さらに楽天のビジネスアセットを活用したサステナビリティ活動推進に加え、人々の働き方・生き方を模索するべく2019年夏から Chief Well-being Officer へ。慶應義塾大学 SFC 特別招聘教授。

村上 敬亮（むらかみ けいすけ）内閣府地方創生推進事務局 審議官

1990年、通商産業省入省。湾岸危機対応、地球温暖化防止条約交渉、PL 法立法作業などに従事。その後、10年にわたって、官の立場からインターネット普及期の IT 政策に携わり、著作権条約交渉、e-Japan 戦略の立案などに従事。

その後、クールジャパン戦略の立ち上げ、地球温暖化防止条約の国際交渉(COP15とCOP16)、再生可能エネルギーの固定価格買取制度の立ち上げなどを担当し、2014年から地方創生業務に着任。2017年から、国家戦略特区担当。



### ○ヒトにやさしい観光とまちの交通の未来

モデレーター：押田 佳子（おしだ けいこ）

三好 孝弘（みよし たかひろ）MONET Technologies 株式会社事業推進部 担当部長

2019年2月に始動したソフトバンク株式会社やトヨタ自動車株式会社などの共同出資会社で、次世代モビリティサービスの提供を目指す。鎌倉市、横浜市、千葉市、豊田市等全国27の自治体と連携し、オンデマンドモビリティサービスの展開を進めている。2020年代には次世代車両によるMaaS事業も展開していく方針。

自身は、ソフトバンク株式会社から出向し、東日本エリアの責任者として活動中。



佐藤 彰洋（さとう あきひろ）横浜市立大学国際総合科学部 特任教授 科学技術振興機構 さきがけ研究員



東北大学大学院情報科学研究科修了。エージェントモデル、応用データ中心科学、メッシュ統計に関する研究に従事。2015年から科学技術振興機構さきがけ研究員。

経済社会分野におけるシステム間相互作用とその共同現象に興味を持ち、集団行動に対するデータ駆動型マネジメントとそのデザインを主たる研究テーマとする。佐藤彰洋著、メッシュ統計（共立出版、2019）など著書複数。

榎原 正博（さかきばら まさひろ）NPO法人湘南パリアフリーツアーセンター理事長 / 株式会社モノ・ウェルビーイング 代表

国立電気通信大学卒業後、総合医療機器メーカー技術開発部に所属し、CE マーケティング取得プロジェクトに従事。画像診断用機器メーカーに転籍し、技術センターへ所属。

現在は、株式会社モノ・ウェルビーイングを立ち上げ、国内外の医療機器、福祉機器、健康機器の開発、許認可取得のコンサルティング業務を行う。



## 【第3部】 分科会

### ○ヒトとテクノロジーがつくる災害に強いまち

モデレーター：中澤 仁（なかざわ じん）慶應義塾大学環境情報学部教授、同政策・メディア研究科委員

スピーカー：酒井 太郎（さかい たらう）さかい内科・胃腸クリニック 院長 / 鎌倉市防災・災害医療アドバイザー

中村 彰二郎（なかむら しょうじろう）アクセンチュア株式会社福島イノベーションセンター（CIF）センター長

#### 中澤（モデレーター）

- 市民による参加型センシングで道路の状況やまちの情報を集め把握する取組を行っている。
- 防災は過去の子測により行われるが、想定外のことも起こり得る。そのため、「災害に強い」というのは、人自身の対応能力が求められる。
- 市民が自ら問題を見つけて知らせることで、防災をジブゴト化することができる。

#### 酒井（スピーカー）

- 東日本大震災、昨年の台風被害時など現場での医療活動を通じて、防災や”備え”について考えてきた。
- 医療の現場からすると、緊急時に在宅で医療が必要な方の優先度がわかるような技術が欲しい。

#### 中村（スピーカー）

- 会津若松では、多様なデータを収集・管理・公開し、分野横断の分析、実験により都市インフラの最適化、産業高度化を進めている。
- 日々の市民生活の向上を目指す「市民オリエンテッド」なスマートシティのためには、市民の個人データを市民自らが納得した上で提供してもらう必要がある。

#### 参加者

- 減災のために、住民同士が地域で学びあう機会を作ることが大切だと思う。
- 防災の最適化のために行政区に閉じず、広域で考える必要がある。枠組みに捉われず、個に必要なものが届く支援を俯瞰してほしい。
- リアルタイムで災害の状況や自らの危険について知りたい。



分科会② まちづくりとヒトの幸福度

モデレーター：加治 慶光 (かじ よしみつ) 鎌倉市深沢地域整備事業推進参与

スピーカー：安藤 健 (あんどう たけし) パナソニック株式会社ロボティクス推進室 総括

小林 正忠 (こばやし せいちゅう) 楽天株式会社 常務執行役員 Co-Founder and Chief Well-being Officer

村上 敬亮 (むらかみ けいすけ) 内閣府地方創生推進事務局 審議官

加治 (モデレーター)

- 人口減少社会に入り、20世紀とは夢が異なる。
- 一人ひとりが、自分の幸せの専門家であるべきである。
- 市民は、行政や政治の難しさを理解し、共同で仕事をしていくことが成長の糧になる。



小林 (スピーカー)

- 他者と比較して優劣をつけることをやめれば、人は幸せになれる。鎌倉は他人との比較ではなく自分と向き合う人が多い印象。
- プラスな意識の人 (1.1の人) が掛け合わさると、1.21、さらに掛け合わさると数が大きくなっていく。1.1の人が増えるように自分も行動していきたい。

安藤 (スピーカー)

- 何かアイデアがあれば、考えるだけで止めずに、少しでも行動してみることや、その仕組みが重要。
- 幸福とは一人では完結することではなく、人との関わり合いの中で生まれる。そのちょっとしたサポートに、テクノロジーを活用できないかと考えている。

村上 (スピーカー)

- 地域の企業は、従業員の給料を上げること (成長戦略) を描くべき。
- 成長を信じて、夢を語りあう人をつなげ直すファシリテータ役が重要で、つながればものすごいパワーになる。
- 自分が、自信を持って人の役に立てると思うことができれば足も動く。

参加者から

- 意識的に行動する人と、自然体でいたい人が共存できる土台として「まち」があるといいと思う。
- 鎌倉はブランド力が高く、教養のある素敵な人が沢山集まっているので、議論ができる場があって良かった。引き続きこういう場を作りたい。



分科会③ ヒトにやさしい観光とまちの交通の未来

モデレーター：押田 佳子（おしだ けいこ）日本大学理工学部准教授/ 博士（農学・工学）

スピーカー：三好 孝弘（みよし たかひろ）MONET Technologies 株式会社事業推進部 担当部長

佐藤 彰洋（さとう あきひろ）横浜市立大学国際総合科学部 特任教授 科学技術振興機構 さきがけ研究員

榊原 正博（さかきばら まさひろ）NPO法人湘南バリアフリーツアーセンター理事長 / 株式会社モノ・ウェルビーイング 代表

押田（モデレーター）

- 「観光」に大事なことは「顎、足、枕」、顎は「食事」、足は「交通」、枕は「就眠場所」。
- 「顎」と「枕」は、自分自身で何とかできるが、「足」はそうはできないことが多い。
- 「観光」とは「日常から非日常への移動」が主のため、「交通」なしには成立しない。



三好（スピーカー）

- 街中の交通標識、案内板、時刻表は分かりにくく、特に鎌倉市は土地的、法規制的な理由から、標識や案内版が複雑になりやすい。
- 最近では、スマートフォンでこれらの課題解決を図っており、例えば「時刻検索、ルート検索、移動手段の手配、各種翻訳」が一気通貫で行えるようなサービスも登場している。

榊原（スピーカー）

- インバウンドや障害者への配慮について、日本では障害者を身体的な特徴でくくりがちだが、外国人も障害者も「案内板が読めない」など、抱えている問題は同じ。
- インバウンドと障害者への配慮を別々に捉えるのではなく、社会的な制約を受けていないか考えることが重要。

佐藤（スピーカー）

- 観光客と住民生活の両立のためには、公共交通をもう一回見直す時期に来ている。
- 単純に公共交通のルートや量を見直すという方法の他、自分たちから少し離れた資源（移動手段）を見つめ直す必要もある。
- 移動に関して、観光客と地域住民で資源の融通を考える必要も出てくるだろう。

参加者から

- 相変わらず道が混雑しているが、信号の動的制御等はやらないのか。
- 人口の行動データ（ビッグデータ・AI関連）の調査等が進んでいないのでは。
- 公衆電話が少なくなりましたが、高齢でスマホといったものに縁がないので、そういった人間を考慮したまちにして欲しい。

